令和３年１月23日

南 の 風 ３８２

南部地区ミニバスケットボール連盟
会　長　藤原　敬一

本号では、皇后杯の決勝をテレビ観戦して私が感じたことを書きます。

トヨタは勝つチャンスは十分あったのに残念でした。

ゲームの入りはよかったです。マッチアップゾーンが功を奏し、ENEOS の中（ペイント）の攻めを封じることができました。また、ENEOS が得意とする、トップの位置からのハイピック（高い位置でのピック＆ロール）のプレー（宮崎と中田や宮澤、中村）も許しませんでした。

オフェンスでは、エブリンの力強い１on１（コンタクトの強さを生かしたドライブからのターンやステップ）、安間のスピードに乗ったドライブイン、そして三好の３P が効果的でした。

一方の ENEOS は、立ち上がりオフェンスのシステムが機能しませんでした。ただこれは無理もないかなと感じました。

渡嘉敷、梅沢、林と怪我人が続出し、W リーグを含めて今シーズン取り組んできたオフェンスを遂行することができなくなってしまったからです。特に渡嘉敷は皇后杯の最中の怪我ですから新たなオフェンスシステムを変えることは不可能です。そこで ENEOS としては、２on２の合わせやドライブでディフェンスを収縮させ、外のショットを狙ったり、ポストを使ったりしてアジャストし易い攻めを取り入れたと想像します。しかし簡単にはいかず、１on１に頼る部分が多くなったようです。

１Q～２Q にかけてトヨタはマッチアップゾーンとスイッチッングマンツーマンの併用で、ENEOS に攻撃の的を絞らせないようにしていました。この戦術はうまくいったと思います。ENEOS が戸惑いをみせ、自分たちのリズムでシュートできなかったからです。中を抑えられた ENEOS はパスがうまく回らず、迷いながら攻める様子が随所に見られました。そのような時に、個の１on１で何とか凌いだのが、宮澤の３P やゴール下のステップシュートであり、中村の力強いドライブからのショットでした。

2Q は出だしから、宮澤が 3P を決めれば安間が3P を入れ返す。中村がパワードライブで得点すれば、ステファニーがミドルを沈める。トヨタのルーキーの平下がドライブからファウルをもらってフリースローで得点したり、ジャンプショットを決めたりすれば、ENEOS はこちらもルーキーの中田がゴール下バックショット、また宮澤のペイントでのステップシュートでやり返す。すると三好が得意のディープ3P を決めるといった入れ合いが続く。

このように2Q は、たいへん見応えのある得点の取り合いが続きました。

3Q の入りは、トヨタのマンツーマンに対して ENEOS のオフェンスがアジャストでき出した。岡本の左ウイングからのスピンターンドライブショットや、中村のペイントでのパワーターンショットが決まる。トヨタはまたも三好がディープ3P をきちっと入れる。その後 ENEOS は岡本のドライブショット、宮澤の3P シュートが決まる。トヨタはエブリンがゴール下へのドライブからのバックショットで対抗するが、岡本が3P を入れて５４対５３の１点差に詰め寄る。ここでトヨタが意地を見せ、三好が３P をしっかり沈め、さらに長岡がゴール下を決め流れを相手に渡さない。この3Q も入れ合いが続くが、終盤にこのゲームの山場がやってくる。　続けて次号をご覧ください。